様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１５８１３

研究課題名（和文）個人のストレス耐性に応じた急性期精神医療者向け研修プログラムによる介入研究

研究課題名（英文）Tailor-made approach based on endurance against stress among acute psychiatric care workers

研究代表者
安部　猛（Abe, Takeru）

横浜市立大学・附属市民総合医療センター・助教

研究者番号：８０６２１３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、急性期精神医療コメディカル全般を対象とし、精神的健康殿維持・改善のためのテーラーメイド型・コミュニケーション・プログラムの効果について検討した。アサーションおよび傾聴を軸とした、年齢、性別、職務経験年数、精神的健康度、ストレス耐性の指標を使用し、クロス集計表からできる複数パターンのプログラムを検討した。また、定量的調査、定性的インタビュー調査を実施し、学術的妥当性、臨床的実現可能性について検討した結果、プログラムの実施と評価において継続困難性の克服が課題であることが明らかになった。今後は研究期間終了後も、永続的に使用可能なオンライン・プログラム実施のスキーム作成が課題である。

研究成果の概要（英文）：We evaluated the effects of tailor-made programs for communication among workers in acute psychiatric care with regard to maintaining or improving their mental health. We also examined various patterns of programs using age, gender, length of work experiences, mental health, stress-resistance, based on skills of assertion and deep listening. In addition, we conducted qualitative surveys and quantitative interview surveys. As a result of testing scientific validity and clinical feasibility, we found that implementing and evaluating programs would have to overcome difficulties in continuing those processes. However, even after the study period, we might develop online-programs with continuity.

研究分野：医療統計学

キーワード：ヘルス・コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

わが国の精神医療における平均在院日数は国際的に見ても長いことが問題視されている。また、精神科病床削減および在宅精神医療への移行は政策上決定されている。

一方、この政策転換によって急性期精神医療・看護・ケアの現場では、精神疾患をもつ患者への対応による従事者のさらなる疲弊が予測されている。従事者の労働ストレスを減じ健康度を保ち、ひいては質の高い医療を提供できる人材を確保するため、有効な教育・研修方法の確立が急務である。また、コミュニケーション・プログラムによる介入の理論的背景には、以下のことが挙げられている。すなわち、精神医療全般および対人支援全般におけるストレスには、様々な労働負担が影響しており、労働内容は、「身体労働」、「認知労働」、「精神労働」が個人の労働負担感に大きく依存している。そこで、この労働負担感を減らし、コメディカル自身の精神的健康に影響すると考えられているのが、「教育」であり、有効な手段とされているのがコミュニケーション・プログラムである。

２．研究の目的

本研究では、コミュニケーション・スキルの改善のためのプログラムによって、ケア従事内容による労働負担感を軽減できないか、検討することを目的とした。合わせて、目的達成のために、文献考察、質的調査による内容分析、実現可能性検討を多面的に実施することとした。

３．研究の方法

１）まず、急性期精神医療従事者に関する研究動向を把握する目的で、系統的文献レビューを行った。検索エンジンは PubMed および医中誌、期間は文献掲載時から 2016 年末まで、キーワードは“精神医療”、“精神保健”とした。

２）次に、プレスタディとして、対人支援従事者に対し、コミュニケーションに関する半構造化面接を実施し、コミュニケーションに関連する要素を抽出した。加えて、対人支援業務におけるコミュニケーション・スキルという観点に基づき、インタビューを内容分析した。

さらに、急性期精神医療子メディカル全般を対象とした、精神的健康度の維持・改善を目的として、個人のストレス耐性に応じたコミュニケーション・プログラムの検討を行った。

３）医療・保健、福祉分野（いわゆるヘルス分野）でのコミュニケーションに関する研究は、ヘルス・コミュニケーション研究として、内外で研究が進んでいることから、系統的文献レビューを行った。検索エンジンは、PubMed および医中誌、期間は文献掲載時から 2017 年末まで、キーワードは、“ヘルス・コミュニケーション”、“介入”とした。

４）コミュニケーション介入研究では、個人のパーソナリティ、行動パターンなどによって、その効果が異なることが指摘されてきたが、特にコメディカルではストレス耐性による影響が大きいとされている。そこで、本研究では、個々人のストレス耐性に対応する、アサーション・傾聴を軸としたテイラーメード・プログラムを検討した。まず、精神的健康度（低・高）と、ストレス耐性の指標でもある首尾一貫感覚尺度により、クロス集計表からできる複数パターンのコミュニケーション・プログラムを検討し、臨床的実現可能性および学術的妥当性を検証した。また、プログラムの特定にあたっては、内外のヘルス・コミュニケーション学、社会医学の専門家に意見を求め、プログラムの内的妥当性を担保するよう努めた。

５）最後に、本研究による知見の発信と、将来的なオンライン・プログラムによるコミュニケーション・スキル研究のため、ウェブページを開設した。

４．研究成果

１）急性期精神医療従事者に関する研究動向把握の目的で、系統的文献レビューを行った結果、該当件数は 71 件であった。そのうち、PSW もしくは MSW による関与が検討され、かつ量的研究に該当した文献が 4 件であった。文献の解析内容から、メタアナリシスは実行できなかったが、内容分析の結果、そのうち 3 件は、チーム医療もしくは相談による介入の前後、それぞれ 1 年間ずつの患者データを抽出して分析していた。すなわち、チーム医療もしくは相談のメンバーとして、ソーシャルワーカーが必ず位置づけられており、特に、受診前のスクリーニングにおいて大きな役割を果たしていることがわかった。一方で、コメディカルのコミュニケーション・スキルに着目した研究知見は見られなかった。

また、後向きの診療録調査が多い理由として、患者や治療介入の性質上、介入研究を実施することは現実的ではなく、観察研究が妥当であることが考えられた。

わが国でも、ACTION-J 研究のように、ソーシャルワーカーを含む多職種チームによる精神科救急領域での介入研究が報告されている。海外の動向を参考にすると、今後わが国では、ソーシャルワーカーやコメディカルを主体とした観察研究や介入研究の報告が期待される。

２）対人支援従事者に対し、コミュニケーションに関する半構造化面接を実施し、関連要素を抽出した（図 1.）。その結果、職場でのコミュニケーションについては、主張困難性、客観的評価、人間関係、情報共有、世代間ギ

ャップ、職場環境が関連要素として挙げられた。すなわち、コミュニケーションの認知に関して、幅広くとらえられており、定義のあいまいさを確認した。

図1. コミュニケーションよって想起する事象の内訳（半構造化面接）

次に、対人支援業務におけるコミュニケーション・スキルという観点に基づき、インタビューの内容を内容分析した（図 2.）。その結果、スキルが要求される、あるいは適用される場面は、対人支援時、職場内、多職種間の三つに分類された。事象から場面を限定することで、コミュニケーシをスキルとして活用できる可能性が示唆された。

図2. 対人支援業務におけるコミュニケーション・ スキル（ 内容分析）

３）医療・保健、福祉分野、いわゆるヘルス分野でのコミュニケーションに関するヘルス・コミュニケーション研究は、過去 5 年間に出版された原著論文数では、定量的研究が 63 編、定性的研究はその約 5 倍 312 編と増加傾向であった（図 3.）。つまり、研究数は一時大幅な増加を見ていたが、近年はやや横ばい傾向であり、これまでに定義されてきたコミュニケーシに限定しない、新たな視点を求められている可能性が示唆された。

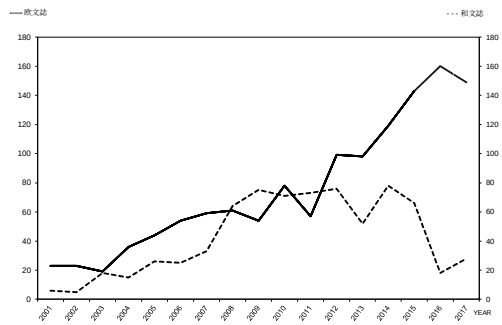


図3. 学術誌に掲載されたInterprofessional Collaboration and Communication論文数の推移

４）また、これまでに対人支援業務でのヘルス・コミュニケーション研究に関し、多面的に検討を重ね、特に定性的研究と定量的研究の特徴と課題を検証した。そこでは、対人支援業務での個人間コミュニケーションにおいては、首尾一貫感覚とコミュニケーション・スキル・トレーニングによるストレス軽減の効果を仮説としていたが、定量的評価でストレス評価することは、妥当性の問題が生じる可能性が明らかとなった。すなわち、既報に散見されるような尺度を用いた労働負担内容の評価は、主観的な要素を代理的に評価している可能性があり、客観的な指標としてストレスを評価しておらず、さらにはアウトカムとの関連を測る指標ともなりえない可能性があることが明らかとなった。

そこで、評価の妥当性と方法論全般について見直しが必要となった（図 4.）。すなわち、コミュニケーション、特に対人支援業務場面での定量的な評価には、一定以上の限界が常に存在することから、まずは定性的評価あるいはミックス法（定量的手法と定性的手法を同時に用いる研究）による評価が必要になってくる可能性があることが明らかになった。つまり、個人間でのコミュニケーションだけではなく、集団内コミュニケーションの評価については、定量的な評価が困難となる可能性が考えられた。また、学術的妥当性、臨床的実現可能性について検討した結果、プログラムの実施と評価において継続困難性の克服が課題であることが明らかになった。

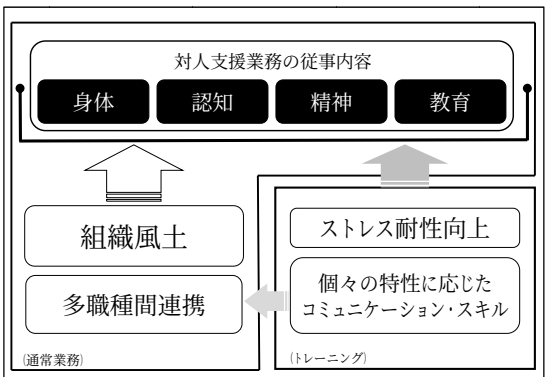
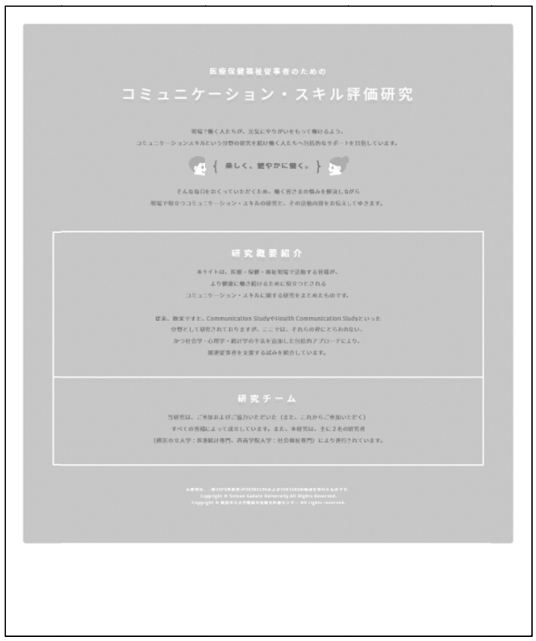


図4. 対人支援業務におけるコミュニケーション・スキル・トレーニングの役割

５）最後に、将来的には、研究期間終了後も、永続的に使用可能なオンライン・プログラム実施のスキーム作成が課題であることから、ウェブページを作成した（イメージ図添付）。今後、継続研究による知見を発信しつつ、ウェブ機能を拡張させ、プログラム実施とデータ収集も電子的かつ沿革的に行えるシステム作りを実施する予定としている。



５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　6 件）
1) 安部猛．コミュニケーションによる介護・医療従事者の健康改善に関する試み．地域ケアリング 2016; 18 (6): 84-87.
2) 安部猛．対人支援での客観的ストレス評価と改善関連要因．地域ケアリング 2017; 19 (1): 54-56.
3) 安部猛．コミュニケーション・トレーニングとストレス軽減の関連(1)．地域ケアリング　2017; 19 (5): 55-58.
4) 山田美保，安部猛．介護・看護での対人支援業務によるストレス評価と今後の課題．社会環境論究 2017; 9: 1-14.
5) 安部猛．コミュニケーション・トレーニングとストレス軽減の関連(2)．地域ケアリング　2018; 20 (2): 64-67.
6) 安部猛．対人支援業務におけるコミュニケーション研究の展望．地域ケアリング 2018; 20 (6): 90-93.

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://skill-carework.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
安部　猛（ABE, Takeru）
横浜市立大学・附属市民総合医療センター・助教
研究者番号：80621375

(2)研究分担者
山田　美保（YAMADA, Miho）
西南学院大学・人間科学部・准教授
研究者番号： 90326992

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）